

待兼山俳句会

第六百九十八回

世話人

山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和七年三月十七日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・東野太美子・向井邦夫
森 茉衣・山田安廣

投句者

碓井遊子・西條かな子・寺岡 翠・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子・東中 乱
平井瑛三 以上出席者十名＋投句者九名 計十九名

兼題

水草生ふ・春愁（幹三） たんぽぽ・春の川（暁子） 当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和七年四月二十一日（第三月曜日）会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時
兼題 豆の花・暮の春（幹三） 朝寝・雀の子（暁子） その他当季雑詠

選者吟

大粒の光集まりたんぽぽに

幹三

塩壺の薄き湿りや春愁

朧夜や舟から舟へ話す声

両岸に人の暮しや春の川

暁子

水草生ひ仲睦まじき鯉と亀

濃く眉をひきて春愁断ちにけり

幹三 選

八百八橋水豊かなり春の川

◎水草生ふ水面に小さき滯引きて

春愁や見知らぬ地へと旅立つ子

◎大股に鷺渡り行く春の川

たんぽぽの絮吹く子の目鼻に寄り

萎れたるたんぽぽ握るおんぶの子

◎音も無く岸を満たして春の川

たんぽぽのぽの字をまるく言うてみし

卓上に桜桃の花盛りなり

◎春の川さうだ笹船流さうか

春の川本意なく別れきし人よ

春愁に空見上げつつ歩を進む

逆光の春の浅瀬を渡る鷺

春の川唱歌うたうて土手歩く

ベレー帽似合ふ日和の梅香る

源流はアルプス春のドナウ川

お伽噺読み聞かす夜や月おぼろ

◎春愁や石仏我とすれ違ふ

たんぽぽの絮と小さき憂さ飛ばす

瑛三

安廣

堯子

兵十郎

堯子

輝子

安廣

輝子

兵十郎

眞知子

かな子

朱美

兵十郎

邦夫

遊子

暁子

安廣

盛雄

太美子

◎水草生ひ仲睦まじき鯉と亀

春愁や別れ告ぐこと無き別れ

琥珀糖すきとほりたる春愁

無聊とも言へず春愁かもしれぬ

水草生ふかつて津波を入れし川

◎兩岸に人の暮しや春の川

春愁手箱の中の貝ひとつ

水草生ひたちまちに池覆ひたり

水草生ふ無数の小さき泡を生み

濃く眉を引きて春愁断ちにけり

たんぽぽに呼ばれ駆け出す幼子よ

暁子

和江

かな子

輝子

翠

暁子

かな子

堯子

暁子

暁子

暁子

幹三 特選句講評

・水草生ふ水面に小さき滯引きて

安廣

水草がついに水中から空中へ、別の世界に触れました。

その印としての「小さき滯」。水の流れの変化と共に春の進行を見つけた作者です。

・大股に鷺渡り行く春の川

兵十郎

いよいよ水温み魚も活発になる頃です。鷺もそれに合わせて行動します。いかにも恐竜の末裔らしい動きです。

・音も無く岸を満たして春の川

安廣

冬、涸れていた川に徐々に水量が戻り、ゆつくりと「岸を満たして」いきます。春の川を観察する俳人の目が生きた一句です。

・春の川さうだ笹船流さうか

眞知子

誰と話しているんでしょう？ひとり言でしょうか？暖かくなつた川辺で思いついたことがそのまま俳句になりました。それも春の川らしいですね。「船」は「舟」としてください。

・春愁や石仏我とすれ違ふ

盛雄

ちよつと不思議な一句。今石仏とすれ違つた気がしたが…実際は自分が石仏の前を通り過ぎただけのことである。何か思いにふけていた故の錯覚でしょうか。

・水草生ひ仲睦まじき鯉と亀

暁子

いよいよ水中にも水辺にも春が来た。ほんわかとした春らしい句。水辺版「鳥獣戯画」のようです。

・両岸に人の暮しや春の川

暁子

省略・切れ、実に気持ちがいい。どんな人がどんな暮らしをしているのであろう。それなりの幸せを感じます。余白も奥行きもどーんと広い句。

暁子 選

◎春愁に浸る吾を見るもう一人

乱

春愁ふ茶髪少女の夕まぐれ

安廣

ゆたかなる独りの時間花ミモザ

太美子

たんぽぽの小道子犬のワルツかな

盛雄

船頭の青の法被や水草生ふ

遊子

◎ふるさとの川に似し川水草生ふ

幹三

春愁や老いのひと日の無事暮れて

翠

カーニバル終りし後の春愁

茉衣

岸の色どれも映して春の川

幹三

隠沼に光の筋や水草生ふ

兵十郎

萎れたるたんぽぽ握るおんぶの子

輝子

◎八百八橋水豊かなり春の川

瑛三

◎たんぽぽの絮と小さき憂さ飛ばす

太美子

春愁や別れ告ぐこと無き別れ

和江

大股に鷺渡り行く春の川

兵十郎

◎朧夜や舟から舟へ話す声

幹三

たんぽぽの絮吹く子の目鼻に寄り

堯子

菜の花の先に海その先に空

幹三

るんるんときらめき流る春の川

眞知子

春愁や亀石の鼻濡らす雨

兵十郎

春愁に身を任せ居り夜半の月

安廣

暁子 特選句講評

・春愁に浸る吾を見るもう一人

乱

春愁、もし俳句という趣味を持っていなければこの美しい言葉を使うことはなかったかもしれない。春になり自然をはじめ何もかもうきうきと感じる反面、何となくもの憂い気分になることをいうが、歡樂極まって感じる哀愁という。後者の例として今日の句では「カーニバル終りし後の春愁 茉衣」が挙げられる。春愁はひどく深刻な心理状態ではない。掲句は冷静に詠まれている。「春愁に身を任せ居り夜半の月 安廣」も冷静だ。私などは春愁というと竹久夢二の描く女性を思うが、「春愁ふ茶髪少女の夕まぐれ 安廣」では現代の少女の春愁が詠まれている。

・ふるさとの川に似し川水草生ふ

幹三

地方出身の方々のふるさとの思い出といえば、唱歌にもあるように故郷の山や川が存在が大きいであろう。故郷の川によく似ていると思ひ、思わず近づいて覗き込むと水草が揺らいでいた。

・八百八橋水豊かなり春の川

瑛三

二月の季題に「雪解川」があるが、「春の川」も早春には雪解けで水嵩が増し、激しい流れの場合もある。やがて穏やかになり、花びらなどを浮かべる流れとなる。

江戸の「八百八町」に対し浪速の「八百八橋」である。

大阪は河川、運河に囲まれた地形を持ち、その水運によって栄えた町であるが、「水豊かなり」で町の豊かさを感じさせる。

・たんぽぽの絮と小さき憂さ飛ばす

太美子

たんぽぽの絮をふっと吹いて飛ばすと心の中の小さな憂さも飛んで行った。この「小さき憂さ」も春愁と言える程度のものであればよいのだが。

・朧夜や舟から舟へ話す声

幹三

「舟」とあるから大きな船ではない。夜釣りだろうか、観光用の舟だろうか、それとも行き交う小さな運搬船だろうか。何を話しているのだろうか。「朧夜」という季節によつていかにも春の夜らしいのんびりとした風景が浮かぶ。

互選三句

朱美 選

遠き日や桜桃の花太宰読む

恵子

春愁や飛鳥大仏眼を閉ぢむ

兵十郎

春愁や見知らぬ地へと旅立つ子

堯子

息子が米国の大学に旅立った日の気持ちがよくえった。

瑛三 選

塩壺の薄き湿りや春愁

幹三

春愁のあてなき道や思案橋

恵子

春愁や飛鳥大仏眼を閉ぢむ

兵十郎

千余年の歴史を見てこられた仏様。今の世の乱れを如何に。

和江 選

ゆたかなる独りの時間花ミモザ
吊橋から覗く川底春愉し
たんぽぽのぽの字をまるく言うてみし
愉しい春野の新発見ですね。

太美子

輝子

輝子

かな子 選

大股に鷺渡り行く春の川
萎れたるたんぽぽ握るおんぶの子
春愁や老いのひと日の無事暮れて
老いの日々の万感がいとおしくも哀しくも人の胸を打つ。

兵十郎

輝子

翠

邦夫 選

大粒の光集まりたんぽぽに
水草生ひたちまちに池覆ひたり
るんるんときらめき流る春の川
春の川を銜いなく真正面から詠んでおり好感が持てる。

幹三

堯子

眞知子

恵子 選

外出禁止つのる春愁口にせず
水草生ふかつて津波を入れし川
先輩の名のなき会誌春愁
先輩を思う気持ち、私も同じ思いをしたことがあります。

翠

翠

和江

堯子 選

たんぽぽに呼ばれ駆け出す幼子よ

暁子

春愁に浸る吾を見るもう一人

乱

朝ドラの元氣印にふと春思

邦夫

朝ドラの賑やかな情景に、昔日の我が家の朝を思い出す。

太美子 選

雲分けてボート滑らす春の川

安廣

大粒の光集まりたんぽぽに

幹三

吾子の来て春愁払ふティータイム

輝子

日常生活の中で見つけた春愁らしさ。

輝子 選

琥珀糖すきとほりたる春愁

かな子

水草生ふ湖面に煙りなき浅間

和江

雲分けてボート滑らす春の川

安廣

ただ一度のボートを漕いだ思い出。青春の一日が蘇った。

兵十郎 選

春の川さうだ笹船流さうか

眞知子

たんぽぽのぼの字をまるく言うてみし

輝子

音も無く岸を満たして春の川

安廣

雪解が始まり水嵩が静かに増えると春を感じる作者。

茉衣 選

逆光の春の浅瀬を渡る鷺

兵十郎

水草生ふかつて津波を入れし川

翠

次々と兵はたんぽぽ古戦跡

和江

廢地となった戦場跡に軍兵に代わりたんぽぽが咲く美観。

眞知子 選

たんぽぽの絮と小さな憂さ飛ばす

太美子

ふるさとの古りし大甕水草生ふ

かな子

春愁手箱の中の貝ひとつ

かな子

小さな憂いがふとあの貝を思い出させる春のひとつ。

翠 選

たんぽぽのぼの字をまるく言うてみし

輝子

先輩の名のなき会誌春愁

和江

稜線のゆるぶ峰峰春の川

和江

周囲の山々の様子を述べ、次に近く川に目を転じた。

盛雄 選

しりとりにや「た」で「たんぽぽ」の声高し

恵子

車掌指差す先にある春の空

幹三

春愁や亀石の鼻濡らす雨

兵十郎

明日香村の亀石と雨の取り合せが春愁の情を喚起する。

安廣 選

たんぽぽのぽの字をまるく言うてみし 輝子

塩壺の薄き湿りや春愁 幹三

春愁や別れ告ぐこと無き別れ 和江

曖昧に別れてしまった淡い心残りが春の宵、胸に迫る。

遊子 選

春愁や飛鳥大仏眼を閉ぢむ 兵十郎

朧夜や舟から舟へ話す声 幹三

一輻の列車ことこと春霞 安廣

一輻では列車にならぬが地方に欠かせぬ足、旅の風物詩。

乱 選

水槽の時空の世界水草生ふ 恵子

春愁や石仏我とすれ違ふ 盛雄

次々と兵はたんぽぽ古戦跡 和江

古戦場に生える蒲公英に戦死者を見た。生き返りか。

参加者自選句

春愁に空見上げつつ歩を進む

八百八橋水豊かなり春の川

稜線のゆるぶ峰峰春の川

琥珀糖すきとほりたる春愁

咲き満つるたんぽぽ畑を二分せり

別れの日出合ひあるらむ春の川

たんぽぽの絮吹く子の目鼻に寄り

ゆたかなる独りの時間花ミモザ

小流にたんぽぽ水車回りだす

大股に鷺渡り行く春の川

春愁の漂ふ日々や四旬節

春の川さうだ笹船流さうか

たんぽぽの笛合奏し登校す

春愁や石仏我とすれ違ふ

音も無く岸を満たして春の川

水輪なす幼きいのち水草生ふ

たんぽぽの花輪のあの子如何に今

朱美

瑛三

和江

かな子

邦夫

恵子

堯子

太美子

輝子

兵十郎

茉衣

眞知子

翠

盛雄

安廣

遊子

乱

即吟

久しぶりの即吟です。

卓上には桜桃の花、そして喇叭水仙（黄水仙）。
どちらも夢のような淡い彩です。

わが余命のごとく淡しや桜桃花

庭先の鉢にびつしり黄水仙

たおやかに生きる人あり黄水仙

遠目にもひときは確と黄水仙

桜桃の花にみよし野近づき来

頓挫して家建たぬ地に黄水仙

迷ひたる喇叭水仙黄の蕊を

目を奪ふ桜桃に添ふ黄水仙

頑なな役所の窓に黄水仙

桜桃の花に思はる里遙か

暁子

邦夫

恵子

堯子

太美子

輝子

兵十郎

茉衣

幹三

安廣

ひとこと

山田安廣

三寒四温を繰り返しながら春は一步ずつ近づいて
いる事が感じられる昨今です。皆様方お変わりなく
お過ごしのことと存じます。

皆様方にご協力頂いております合同句集は第三校
を終え、四月上旬にはお手元に発送できる予定で進
行しております。

発送が終わりますと印刷会社へのお支払いが必要
となりますので、四月の例会（四月二十一日）を目途
に参加費の集金をさせて頂きたいと存じます。お支
払い方法などは後日ご案内致しますので、四月上旬
のメール配信にご注意を賜り、例会までにお支払い
をお願い申し上げます。なお、例会にご出席の方は当
日現金をご持参頂いても結構です。

長くなりますので、今回はこれにて失礼いたしま
す。